

2020 年度文学部英米文学専攻ガイダンス

英米文学へようこそ！

巽 孝之

(慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授・アメリカ文学専攻)

昨年度まで日吉キャンパスで過ごされていたみなさんは、いよいよ今年から三田キャンパスの専門課程で学ぶこととなります。ここには、すでに二年生以降を過ごした三年生や四年生もいるはずですが、そもそも、みなさんは、一体なぜ慶應義塾大学を志望したのでしょうか。

偏差値が高いからとか、家族が三田会だからとか、実学を重視しているので就職するときに都合がよさそうだからとか、理由はいろいろあるでしょう。

しかし、我が国にあまたある大学のうちで慶應義塾大学の文学部、それも英米文学専攻を選ぶということには、特別な意味があります。

たとえば三田キャンパスの南館に入ると、「学生」と命名された芸術作品がみなさんを出迎えてくれますが、これを制作したのは世界的に著名な芸術家イサム・ノグチ(1904-88年)です。そして彼の父である野口米次郎(1875-1947年)こそは、19世紀末にここ慶應義塾で学びながら、アメリカ西海岸はサンフランシスコに渡り、ヨネ・ノグチの名前で英文詩集を出版して英米でたちまちセンセーションを巻き起こし、1914年には何とオックスフォード大学に招かれ講演まで行った国際詩人でした。アイルランド詩人 W・B・イェーツとは良き友人であり、その秘書をしていたエズラ・パウンドに我が国の俳句の魅力を教えています。ノグチがいなければ、モダニズム文学そのものが成立しなかったと言っても過言ではありません。そしてそのヨネ・ノグチが晩年、教鞭を執ったのが、たった今みなさんがおられる母校慶應義塾の英米文学専攻だったのです。

さて、ノグチの若い同僚には、オックスフォード大学留学から帰ったばかりの西脇順三郎(1894-1982年)がいました。西脇は学部こそ理財科、すなわち現在でいう経済学部の出身ですが、慶應義塾からイギリス留学を命ぜられたのちには、ロンドンで英文詩集を出版して、イギリスを代表する書評紙 *TLS*(Times Literary Supplement)で書評されています。帰国後の西脇順三郎は1920年代のモダニズムのうちでもシュールレアリスムの影響を強く受けた詩を発表して一躍、日本を代表する詩人となり、戦後にはエズラ・パウンドの手でノーベル文学賞候補にも推挙されます。しかし、全く同時に、西脇がオックスフォード大学で受けた教育成果は、帰国後の英米文学専攻に古代中世英文学をもたらし、教え子の厨川文夫教授と共にそれを慶應義塾独自の必修科目に定着させました。

現在のみなさんは、ひょっとしたらたんに英語が好きだという単純素朴な動機でここに集まっておられるかもしれません。英米文学専攻なのだから、ここで一生懸命学べば実用的な英語も上手くなるかもしれない、と。しかし、今ご紹介した本塾英米文学専攻の立役者たる野口米次郎も西脇順三

郎も、若き日にアメリカやイギリスに留学して目指したのは、「英語を学ぶ」というよりも「英語で考える」、その結果「英語で何かを作り英米人と対等に渡り合う」ということでした。このように学問の志を抱きながらも国際詩人として名を馳せた二人の学匠詩人が本塾英米文学専攻の基礎を作ったのです。全国に英語英米文学を教える大学は数あれど、そんな先人を持つのは本塾に限られません。

最後にもう一つ、今年 2020年はコロナウイルスのために東京都をはじめとして日本各地に緊急事態宣言が出され、大学も史上初めてオンライン授業をしなければならないという試練の年ですが、そんな緊急事態の時には決まって、私が思い起こすこととお話ししましょう。それは、慶應義塾大学の開祖にして近代日本の父・福沢諭吉(1835-1901年)が何よりも尊重したのが「学問の自由」だったということです。

国民的ベストセラー『学問のすゝめ』(1872~96年)に先立つ慶應4年(1868年)、慶應義塾が発足した記念すべき年に、維新政府軍と旧幕府派の対立が激化した戊辰戦争が勃発し、5月15日の上野彰義隊の戦いを迎えた江戸市中は混乱をきわめ、「芝居も寄席も見世物も料理茶屋もみな休んでしまって、八百八町は真の闇(やみ)、何が何やらわからないほど」でした(『福翁自伝』)。けれどもそのなかで福沢諭吉はいつもと変わらず土曜日の日課であるウェーランド経済書(Francis Wayland, *The Elements of Political Economy*, 1866)を講述する授業を続けたのです。それは、世の中にたとえいかなる変動があっても、慶應義塾の存する限り、わが国における学問の命脈は一日たりとも絶やしてはいけなことを象徴するエピソードとして、長く語り継がれてきました。1954年からはその日、5月15日は「ウェーランド経済書講述記念日」と定められ、毎年三田演説館で記念講演会が開かれています。

もちろん、英米文学専攻には、その必修科目は他専攻以上に厳しいという定評があります。けれども、天災であれ人災であれ、いかなる災厄の下にあっても「学問の自由」だけは守らねばならないこと、そして学問に専念できる時間を人生の一時期に持つのは至上の幸福であることを福沢諭吉が自ら体現したことは、今後も折に触れて思い出していただきたいと思えます。

以上簡単ではありますが、歓迎のご挨拶に代えさせていただきます。